「いわての復興教育推進事業（震災学習列車活用スクール）」成果報告書

学校名：洋野町立林郷小学校

Ⅰ　事業の概要（地域の実情含む）

本校は、大野の中心部より北東にあり、久慈平岳の裾野に広がる高原地帯に位置している。北西から南東に流れる有家川の流域に水田が開け、それに沿って、約７ｋｍにわたり集落が点在している。その中間地点に学校が位置している。昭和の中頃までは、大雨による有家川の氾濫が度々起こっていたが、河川改修により被害は皆無になった。平成２８年の台風１０号の際も、目立った被害はなかった。また、平成２３年の東日本大震災の際も直接的な被害はなく、児童の記憶も薄れており、防災に対する意識は高いとは言えない。

このような実態を踏まえ、今年度は「いわての復興教育推進事業（震災学習列車活用スクール）」を活用し東日本大震災についての学びを深めることを通して、児童の防災に対する意識を高めたいと考える。

Ⅱ　取組の概要

１　ねらい

震災学習列車や震災当時を知るゲストティーチャー、復興教育副読本を活用し、東日本大震災についての理解を深める。自分たちにできることとして「防災まっぷ」づくりを行い、自然災害への心構えをもつことを通して、防災力を高める。

２　取組の内容

ア　事前学習　　イ　震災学習列車乗車体験

ウ　津波語り部から話を聞く　　エ　事後学習

３　具体的な取組　〔対象〕全校児童 25 名

ア　事前学習「３・１１を学ぶ①」

最初に林郷は安全なところか児童に問いかけた後、学習のねらいとゴールを確認した。

次に、実地踏査の際手に入れたリーフレットや復興教育副読本（Ｐ42～Ｐ43）を活用して、震災の様子を想像させた後、ゲストティーチャー①から、混乱と不安の中で出産を迎えることになった母親としての話を聞いた(VTR)。

次に、復興教育副読本（Ｐ4～Ｐ5）を活用して、三陸鉄道の復旧について関心をもたせた後、ゲストティーチャー②から、復旧を諦めなかった三鉄マンの話を聞いた。

普段とは違って、自分たちに真剣な表情で語りかけてくるお母さん、お父さんの姿に、児童も自然に引き込まれていった。

【ゲストティーチャー①】

【ゲストティーチャー②】

イ　震災学習列車の活用「３・１１を学ぶ②」

①震災学習列車乗車体験（久慈駅→田野畑駅）

三鉄の方から、東日本大震災当時の様子や復興に関わる話を聞いた。今は穏やかな海と提示される資料を見比べながら、被害の大きさと復興の様子について理解を深めた。

【三鉄の方の説明を聞く】

②津波語り部からお話を聞く

田野畑地区で、津波語り部からお話を聞いた。当時の写真と現在の様子を対比させながらの説明だった。説明や姿を変えた町並みから、津波の恐ろしさと「津波てんでんこ」の大切さを学んだ。

【津波語り部の説明を聞く】

③野田村役場防災担当のお話を聞く

十府ヶ浦公園において、野田村役場防災担当の方から、野田村の東日本大震災当時の様子や災害に強いまちづくりについて説明を受けた。

【野田村役場防災担当の説明を聞く】

ウ　事後指導

①防災さんぽ「地域から学ぶ①」

復興教育副読本（Ｐ６３）を参考にして、「防災まっぷ」をつくるための「防災さんぽ」を行った。地域の方の協力を得て、各地区の過去に災害があった場所、危険が予測できる場所、安全に関わって整備して欲しい場所を確認した。

【地域の方との防災さんぽ】

【忘れないようにその場ですぐメモ】

②防災まっぷづくり「地域から学ぶ②」

防災さんぽで確かめてきたことを付箋で、ピンクは危険箇所、過去に災害があった場所、イエローは危険を予想した場所、ブルーは「～があれば安心」と思う場所に色分けをして地図に表した。自分の目で確かめてきたことにより、児童の防災意識が高まった。

【地域の方の意見も聞きながらまっぷづくり】

【防災まっぷの交流】

【完成した防災まっぷ】

【学習を振り返り意識の変化を確認する】

③作品交流「学びを広げる」

大野地区の小学校４校で交流し、震災に対する感じ方や考え方の幅を広げる活動を行った。

【他校のまとめを見る児童】

Ⅲ　取組の成果と課題

１　成果

（１）　保護者をゲストティーチャーに迎え、震災当時の話を聞くことで、遠かった震災が、自分たちの身近で起こっていたものとして捉えることができた。

（２）　三鉄の方、津波語り部、野田村防災担当者から話を聞いたり、実際に被害を受けた場所や現在の様子を見学したりすることで、震災の被害や復興の様子を知ることができた。

（３）　防災まっぷづくりを通して、安全だと思っていた学区内で過去に起きた自然災害を知ったり、予想される危険などを考えたりして、防災に対する意識を高めることができた。

２　課題

（１）　震災の記憶が薄い、若しくは無い児童が増加していく中の復興教育のあり方を本校の実態をもとに検討していくこと。

（２）　防災まっぷづくりで得た人的・物的財産を活用、発展させていくこと。